

WORLD MOOK 1033
Heller's Cafe Vintage Archives
Vintage King

Author
LARRY MCKAUGHAN

Publisher
KESAHARU IMAI

Editor
HIROKO ITO

Book Design
TAKU MIZUNO (BASE)

Japanese Text
MASAKI FUJIKI (WAREHOUSE)

Photography
RICK DEAN
YASUJI YUSHINA (WPP)

Editorial Support
HELLER'S CAFE INC.
<http://www.hellerscafe.jp/>
LARRY MCKAUGHAN
SCOTT MOY

Contents



8 Birthplace of Vintage King

ヴィンテージ・キングが生まれた場所。

10 Long Interview

家族のこと、生い立ち、ヴィンテージディーラーになるまで、そして現在のトレンドなど。ラリーが初めてすべてを語ったロングインタビュー。

16 Heller's Cafe

ノースダコタに実在したヘラーズカフェ。
そこは人々が憩い、集つた娯楽施設だった。

18 Larry's Beautiful Life

古き良き時代のラリー。1940年代から1960年代の家族写真から読み解くラリーの素顔。

26 MAJOR BRANDS

「WORKWEAR」ブランドからファッショングランドへと登りつめたメジャーなブランド。

88 BORO & UNUSED DEAD STOCK

「一生モノ」などという言葉が簡単に使えなくなるぐらい着込まれた「ボロ」と、「主人」を今だに待ち続けるデッドストック。

102 MILITARY CLOTHING

国家予算をかけて信頼のおけるメーカーが作った
その時代の最新技術の開拓、ミリタリーコロージング。

128 SPORTS WEAR

「より動きやすい衣料」へと進化をとげたスポーツウェア。
その進化の過程に見られる「ワークウェア」のようなディテール。

142 STORY OF AFTER WW1

第一次大戦以降、大きな変化をとげた
ワークウェア、スポーツウェア。

148 HUNTING & OUTDOOR SPORTS

ミリタリーウエアをベースとした、バリエーション豊富な
ハンティングウエアとアウトドアスポーツのクロージング。

168 MEN'S CLOTHING

第二次大戦以前の、まだ紳士服にカジュアルもフォーマルもなかった時代。
外出時、男性は必ず着帽していた。そんなジェントルマンな雰囲気をもったウエアたち。

174 OUTERWEAR

まさしく「一生モノ」と呼ぶべき珠玉のメンズアウターウエアの数々。

182 HEADWEAR

ワーカーの頭を守るだけでなく、職業に対する
プライドを表すシンボルでもあったヘッドウェア。

186 ORDERMADE TO READYMADE

受注生産品から既製品にいたるまで。年代の違う
アイテムの比較から読み解くファッションの変遷。

200 OVERALLS & COVERALLS

パンツの上からはいて主に胸から下を覆ったオーバーオールと
袖ありで手首まで体を覆ったカバーオール(ツナギ)。

204 Salesman Samples

フットワークを軽くするためのセールスマンのアイデア。

214 WAIST OVERALLS TO PANTS

「オーバーオールからズボンへ」アメリカ人の上半身を解放した
ウエストオーバーオールから、ベルト通しのパンツになるまでの足跡。

222 READYMADE DRESS SHIRTS TO WORK SHIRTS

効率化を図り、合理的な仕様を取り入れ始めたワークウェアの縫製と
「合理化」しきれない時代に残されたユニークなディテールから伝わるぬくもり。

WORLD MOOK
ワールド・ムック1033

Heller's Cafe Vintage Archives **Vintage King**

Larry McKaughan

Photo/Rick Dean

Japanese Text/Masaki Fujiki (Warehouse)

ヴィンテージ・キング

ラリー・マッコイン

写真／リック・ディーン

日本語解説／藤木将己(ウェアハウス)



ベルトループがないという以外、ほぼ完全に「5ポケットジーンズ」として完成している20世紀初頭（1900年代）に作られたリーバイス501XX。サスペンダーボタンに残る縄は、サスペンダーが壊れた代わりに吊っていたものだろうか。100年以上も経過しているのに、濃紺と呼べる状態で残っているのが奇跡に近い。この時代、ジーンズは糊のついたまま着用することも多く、今のように「色落ち」を目的にはくことはなかったであろうから、極力洗濯を避けていたのだろう。だからこそ、今の時代にもこの強い濃淡を見ることができるのだ。

Circa 1900's Levi's 501XX buckle-back pants with exposed rivets, no belt loops, and in excellent condition.



リーバイスの「ファーストのGジャン」と呼ばれる506XXも色落ちし、カスタムが施されるとここまで違う表情に。左はセカンドハンズどころか、何人のオーナーを経て70年代にフォークアートとして装飾されたようなヒッピーテイスト。右は歴史の重みを感じさせる、絵画のようなインディアンヘッドの刺繡だ。既製服であるデニムジャケットが色落ちだけでなく、その時代ごとに手に入れたオーナーによってさまざまな表情に変化するところが興味深い。

Two Levi's 506 1st edition jackets. One is embroidered with hippy style embellishments (1930's) and the other with Indian head embroidery (1930's).





1920年代のフットボーラー姿のバディーリー。グリーンのニットジャージに、フェルトのDのマークは「ダートマス大学」であると推測できる。きちんとレザーで作られたヘッドラギアをかぶっており、パンツは当時のユニフォームと同素材のツイール。補強のステッチまで両膝に縫ってある。当時は有名大学の対抗戦などで両大学のイニシャル入りのバディーリーを販売していたそうだ。バディーリーの知名度を上げるために積極的な売り込み戦術と言えるだろう。



マーケティングに長けたLeeのもっとも敏腕な「宣伝部長」と言えるバディーリーは、1920年代に登場した。当時はLee製品の取扱店のディスプレイとして製造されたものであったが、多くの商品化の要望を受けて販売されることになった。Leeは「ユニオンオール」などのワークウェアの広告をサタデーイブニングポストに掲載した際に、「JUST LIKE A DADS'」として、同じデザインの子供服も掲載しているが、この広告に描かれている子供に「名前をつけてください」と公募をしている。そして名づけられたのがこの「バディーリー」である。「お父さんと一緒に」とうたいながら、キャラクターに関心をもたせるイベント企画力は、ほかのワークウェアメーカーを凌ぐと言えるだろう。

Buddy Lee advertising dolls were introduced in varying uniforms. First introduced in the 1920's, they were used as store displays and children's toys. They often represented the companies that ordered uniforms to Lee company. Later, Buddy Lee dolls became a collector-item and were sought after by vintage collectors as well as doll collectors; the rarer the outfit the more desirable the doll is.



1920年代のユニオンオールを着たバディーリー。1920年代から1940年代までの初期のモデルは、おがくずや紙などを混ぜて型で抜いた、壊れやすいコンポジションドールであった。このため表情などに独特のひびが入る。帯がブルーのもので、前合わせは左になっている。女性用のものもあり、そちらは帯がレッドで、前合わせは右である。



WABASHストライプのユニオンオールを着たバディーリー。これはシュタイフェル社の生地で、インディゴで染めた平織り生地に抜染プリントでストライプを入れたもの。1920年代にはオーバーオールやカバーオール、子供のプレイスーツなどもこの生地で生産されている。



米軍のユニオンオールに身を包んだバディーリー。こちらは前合わせが右になっているので、女性整備士などをイメージしたものと考えられる。1920年代のバディーリーは、ユニオンオールを着たものが多いが、これは広告で見てもわかる通り、同社の主力商品であったからである。



ハウスマークのワークキャップをかぶった鉄道機関士スタイルのバディーリー。オーバーオールはロングJマークのスナップボタンがついている。インナーに着ているのはシャンブレーワークシャツ。1930年代のもの。



こちらも鉄道機関士をイメージして首周りに煤汚れ防止用のバンダナを巻かせたもの。デニムシャツの上からデニムのオーバーオールを着用させている。赤いバンダナももちろんLee製である。



となりのモデルとほぼ同じ年代に製造された鉄道機関士イメージのバディーリー。ヒッコリーストライプのシャツに、同じ生地のオーバーオールを着用して、赤いバンダナを巻いている。オーバーオールの新旧はポケットで判別できる。20年代から30年代までのものは貼りつけのポケットがついており、それ以降はダミーのものにステッチのみが入る。



1920年代の打ち抜き式のボタンがつくデニムオーバーオールスタイルのバディーリー。腕が太く、指が曲がっていることから初期のものと推測でき、フロントポケットはダミーであるものの、バックポケットが貼りつけタイプとなっている。夏のファーマーをイメージしたものだろうか。シャツは着用していない。



フックレスファスナーのWHIZITオーバーオールを着用した重責なバディーリー。1920年代にはファスナーはまだ貴重で、WHIZITとは当時Leeが打ち出した新しいオーバーオール。ユニオンオールとオーバーオールのよい部分を合わせたタイプのベストのように見えるつなぎだが、そのディテールは「シールドバック」と呼ばれる、のちのLeeのオーバーオールの背面のデザインに後継されている。



ユニオンオールタイプのデニムオーバーオールを着用したバディーリー。バディーリーのボタンがついていることから最初期のものと思われる。顔にはコンポジションドール独特のひび割れが生じている。デニムをヨコ使いしているためボーダー状に見える。



1873年にリーバイスがジーンズの製造を始める以前にも、すでにワークウエアを造っていたメーカーのひとつに、リーバイス社と同じサンフランシスコのバッテリーストリートにあった「エロッサー・ハイマン社」がある。鶏をキャラクターにした「キャントバスト」ブランドを所有していた同社は1851年にはビジネスを開始。1860年代にはデニムを使ったワークパンツを製造していたようである。リーバイスと同じように、1906年のサンフランシスコ大地震で資料は焼失してしまったものの、20世紀の初めにはロサンゼルスからポートランドまでの販売網を確立していた。黒のツイル地で作られたこのワークパンツは、1920年代に顧客たちから「フリスコジーンズ」というニックネームをつけられており、エロッサー・ハイマン社もこの名称をラベルに印字するようになった。インディゴのデニムパンツではないにせよ、「ジーンズ」という言葉をウエストオーバーオールが主流のこの時代に使用しているのは驚くべき事実である。

1920's Can't Bust 'em black twill work pants.



THIS IS THE No. 1 OVERALL
The Overalls With This Label
Stand Head and Shoulders Over Every
Other Overall You Can Buy



THEY WEAR LIKE IRON
Made of the Toughest Cloth
Sewed With the Strongest Thread
Every Stitch Guaranteed

THIS IS THE No. 2 OVERALL

It is Fully Guaranteed
If the Sewing Rips Your Dealer Will
Give You a New Pair



DO YOU WANT ECONOMY?
The No. 1 Grade With the Colored Label
Costs So Little More—and Wears So Much Longer
That It Is Cheapest in the End

ダック地で作られた1920年代頃のキャントバストのオーバーオール。左のデザインと同じカラードラベルがつけられている。キャントバストはしばしばリーバイスの製品を広告で揶揄しているが、これは当時No2デニムを作っていたリーバイスや、「もし破れたら、新しいものと無料で交換」と簡単に謳っている他社に対して打ち出している広告である。「購入できるすべてのワークウエアの中で、このラベルがついたオーバーオールは頭ひとつ抜きん出ています。鉄のように丈夫。タフな生地を丈夫な縫製糸で縫っています。縫い目のひとつひとつまで保証」。そして、No2のラベルを掲示し、「もし破れたら、新しいものと無料で交換」というセールスに対して「本当に得なのはどちらでしょう?」と問題提起。「カラードラベルが目印のNo1級なら、少しのコストをかけるだけで、長く着れるのです。最終的にこれがもっともお買い得」としめている。破れるような衣料は何度交換しても破れる。それなら信頼のおける縫製のものをもう少しのコストをかけて購入するべきで、それがカラードラベルだという広告である。同社はそのほかにもリベットを使用したワークパンツを、「錆びるリベットよりも、スレッドリベット(カンドメ)の方が丈夫です」とも謳っている。



Can't Bust 'em by Frisco
Jeans black denim oversized
advertising piece.



Paper mache Can't
Bust 'em store
advertising rooster,
extremely rare.

Turn of the century
new old stock brown
duck Can't Bust 'em
bib overalls,
centered cloth label.